

フツセル筆「フランチ・ブレントナーの想出」

細井雄介

### **Husserl's memories of Franz Brentano** ---

In the previous issue (Vol. 132) I could complete my translation of the first book of the art historian Alois Riegl (1858-1905). As one of his teachers has been counted usually the philosopher Franz Brentano (1838-1917). Happily we have an excellent document about the academic atmosphere in those days, that is, the memories of Edmund Husserl (1859-1938).

I have great respect for the content of this document. So, as before, in order not to miss any detail I have translated the whole of the memories into Japanese here.

The original text is as follows:

Edmund Husserl, *Erinnerungen an Franz Brentano*. in: *Husserliana* Band XXV (Edmund Husserl, Aufsätze und Vorträge 1911 — 1921), Nijhoff 1987, S. 304-315.

本稿の目的は後段に置く回想記の翻訳紹介である。

本論叢先集（第百三十二集）では美術史家リーゲル（Alois Riegl, 1858-1905）最初の公刊本『オリエント古絨毯』の翻訳を完結することができた。早逝の人ながら「触覚的」－「視覚的」なる対概念の操作や「芸術意思」の語用でも名高く、「ウィーン学派」のなかで折々「哲学的」と称せられる巨星である。ところが学歴を見ても哲学の素養のほどは定かでない。学位論文はマイノング（Alexius Meinong, 1853-1920）のもとで成り、マイノングの師ブレンターノ一八七五年の倫理學演習に出席（Michael Gubser, *Time's Visible Surface*, 2006, p.74）と記されるが、さらに詳しくは踏込めないのが実状であろう。もとより師弟間の学問継受の機微は教室への出席の有無や多寡などで量れる事柄でなく、両者がそれぞれ一家を成す独自の存在であるときには語るのがますます難しい。具さにリーゲルの多くの文章と接した限りでは、ペヒトの言葉通り「リーゲルの哲学的素養についてはほとんど解らない。大体は自家製哲学 home-made philosophy の一例である」と見える」（Otto Pacht, Alois Riegl in *Burlington Magazine*, Vol. 105, 1963, p.193）としてよいであろう。

けれども学生時代の姿となれば面白い事実につながる。やがて現代の現象学を華々しく樹立する哲学者フッセルと美術史家リーゲルとはほぼ同年の生れであり、双方いずれにも師としてブレンターノの名が挙ることである。フッセルが二年師事のブレンターノを離れてハレ大学に移るのは一八八六年で翌年に哲学の学位を得て、以後この地で一九〇一年まで私講師の身分である。リーゲルの学位取得は一八八三年だが、なおも学内「歴史研究所」に留まっていた一八八六年に「オーストリア博物館」入り、一八九七年まで学芸員として十年ほどの活動となる。フッセルにはわずか二年の教室であったが、冬学期の一八八五年十月に始まったブレンターノの特殊講義が「想像力（Phantasie）考」であり、掲げられた題目からして、これをリーゲルも聴いた可能性は無しとは言えないであろう。新たな時代

を開いた両大家として名を成す前の二十七、八歳の青年が、さほど広くもない大学の構内や教室で互いに目札を交したかも知れないと思描くのは楽しいでないか。

ブレンターノは心理学が哲学を先導する時代に出てアリストテレス研究者としても重視されたが、いまやわが国ではフツセルの師として特記されるぐらいで一般に知られているとは思えない。だが幸いにも昨(二〇一八)年二月、リクエスト復刊で二十八年振りに『天才・悪』(岩波文庫「初版一九三六年」第10刷)の公刊となった。右記の「想像力考」に直結するとしてよい二講演を収めた小冊である。これを好機として迎えたい。このたびの回想記は新たな学の醸し出される学園内外の雰囲気伝える記録としても貴重であるゆえに、ここに敢えて訳出する次第である。

まずブレンターノの略歴を記す。レクラム文庫にグロックナーによるヨーロッパ哲学の大観があるので、ここに掲げられている短文の紹介を土台として各種若干の情報で補うことにする (Hermann Glockner, Die europäische Philosophie. [1958] 1968, Universal-Bibliothek Nr. 8233—46, Reclam-Verlag, S. 1006-1007)。

ブレンターノ (Franz Clemens Brentano, 16. Januar 1838—17. März 1917) はドイツ西部ラインラントのポツパルト Boppard 近傍マリーエンバルク Marienberg で生れた「早逝の父は Christian B., 母は Emilie B., 弟は Lujo Ludwig Josef B., 1844-1931 は経済学者となり高弟のひとりか明治大正期の福田徳三である」。ロマン派詩人クレメンス・ブレンターノおよび妹作家ベッティーナ・ブレンターノ・アルニムの甥であった。ギムナジウム (Aschaffenburg) で育ち、ミュンヘン、ヴュルツブルク、ベルリン、ミュンスターで哲学・神学を修め、テュービンゲン大学で博士号を取得、貴重な下記の研究によってである—— Von der mannigfachen Bedeutung des Seienden nach Aristoteles, 1862. 一八六四年に司祭 (Priester) となり、一八六六年ヴュルツブルクで哲学教授資格を得て一八七二年にヴュルツブルク大学教授

就任だが、教会への異議ゆえか早くも翌一八七三年に教授職を辞して（門下の Anton Marty, 1847-1914 や Carl Stumpf, 1848-1936 とともに）カトリク教会から離脱した。一八七四年ウィーン大学に招かれて一八八〇年まで講座担当教授（Lehrstuhlinhaber）となる。この教授時代に銀行家の娘イーダ（Ida Lieben, 17. Mai 1852—13. März 1894）と結婚するが、このとき、かつて司祭であった身分に絡む違法性の紛糾が生じて、またも教授職は辞任するしかなかった模様であり、以後は私講師（Privdozent）として、結局この身分のまま夫人の死後一八九五年までウィーンに留まった。一八九五年フィレンツェに転出して一八九七年にエミーリエ夫人（Emilie Ruesprecht）と再婚、第一次世界大戦を避けて一九一五年チューリヒに移住、一九〇三年以来の失明ながら一九一七年の逝去時は七十九歳であった。

フッセルについては回想教篇に続けて全頁大の写真版一七〇葉ほどを連ねた編年史がある（Edmund Husserl und die phänomenologische Bewegung——Zeugnisse in Text und Bild. Verlag Karl Alber Freiburg/München 1988）。フッセルに添えられた短文にもとづいて、本稿「想出」内の著書出版にいたるまでの略歴を掲げよう。

フッセル（Edmund Husserl, 8. April 1859—27. April 1938）は今日のチェコ東部メーレン地方（Mähren 英語形 Moravia）の都市オルミュッツ（Olomütz = Olomouc オロモウツ）近くのプロースニツ（Proßnitz = Prostějov）でユダヤ人織布商の息子として生れた。当時のチェコは、一八六七年にオーストリア＝ハンガリー二重君主国となるハプスブルク王家オーストリア帝国の一地方であった。ドイツの西南部に生れたブレンターノとの年齢差はほぼ二十年となる。

オルミュッツのドイツ系ギムナジウムで学び、最低の生徒（„Husserl ist unser schlechterer Schüler gewesen.“）として一八七六年に卒業できるが、この資格取得のための集中的猛勉強で心を奪われたのが代数理論の美しさであったという。一八七六年秋にライプツィヒ大学でまず三学期間は天文学の席を取り、傍ら数学・物理学・哲学の講

義を聴く。ここで九歳上のマサリク (Tomáš Garrigue Masaryk, 1850-1937, 後年一九一八年に独立するチェコスロヴァキアの初代大統領「二九一八—一九三五」と知合って、近世哲学史の展開および同時代哲学者たるブレンターノの存在をも教えられる。一八七八年の夏学期はベルリン大学に移り、続けての六学期「三年」はヴァイアシュトラース (Karl Weierstraß, 1815-1897) とクロネッカー (Leopold Kronecker, 1823-1891) の数学講義、パウルゼン (Friedrich Paulsen, 1846-1908) の哲学講義を聴き、一八八一年ベルリンを去りウィーンに移って数学論文を仕上げ、一八八二年の秋に学位を得る。このときのウィーンでフッセルはマサリクと再会している。一八八三年夏の一学期はベルリンに戻ってヴァイアシュトラースの用務を果し、一八八三年十月から一年のあいだ志願兵としてオルミュッツおよびウィーンで兵役に就く。兵役を終えてなおウィーンに滞在するときブレンターノの講義に接して、一八八六年夏までは本稿「想出」のごとく教室以外でも親しい間柄としての勉強である。

初対面から二年後となる一八八六年にブレンターノの推薦で二十七歳のフッセルはドイツのハレ大学へ行き、以後この地に一九〇一年まで留まる。ブレンターノの門弟シュトゥンプフ (Carl Stumpf, 1848-1936) のもとで大学教授資格の取得に励み、一年後の提出論文が「数の概念について」である。同じ年一八八七年に結婚し、私講師としての歳月であり、家庭の友にはシュトゥンプフ、数学者カントール (Georg Cantor, 1845-1918)、古典語学者フォン・アルニム (Hans von Arnim, 1859-1931) の姿があった。

右の資格取得論文を本体として四年後の一八九一年に公刊の書が「想出」に語られる『算術の哲学』だが、さらに研鑽の歳月を経て一九〇〇年に画期的な『論理学研究 (Logische Untersuchungen, I. Teil)』を著し、翌一九〇一年フッセルはゲッティンゲン大学の教授職に移って華々しい時代を開くのであった。

ちなみに「フッセルの事」とはわが国が遺す貴重なフッセル回想文である。フッセルは一九一六年フライブル

ク大学に正教授として移って一九二八年同大学名誉教授、同年に後を継ぐ正教授がハイデガー (Martin Heidegger, 1889-1976) であった。わが誇るべき高橋里美 (一八八六—一九六四) は一九二六年秋から一九二七年夏にかけての二期間フッセルの教室に在り、他の日本留学生ともども自宅にも招かれている。この席の情景は昔日の師弟交流の有様さながらであり、執筆は二年後の一九二九年 (フッセル七十歳) だが、本稿の「想出」を読んで思重なる者には、感銘の一層切々となる老教授フッセルの印象記であろう (高橋里美『フッセルの現象学』所収 第一書房 一九三一年)。

師布伦ターノは一九一七年三月に歿し、本稿の「想出」は一九一九年の下記公刊本に載る——Oskar Kraus, Franz Brentano. Zur Kenntnis seines Lebens und seiner Lehre. München 1919. S. 151-167. 後年のことだがヒトラーの制圧下でフッセルの遺稿救出に尽力するチェコのクラウス (Oskar Kraus, 1872-1942) はマルティ「前出 Anton Marty」のもとで育った布伦ターノ学徒であり、このクラウスの乞いに応えてのフッセルの執筆であったと思われる。今日この「想出」はフッセル全集 (Husserliana) 内に収められているが、編者の注記によれば、もともとはクラウスの原著に zweiter Beitrag (第二附録) として初出であった。

これは逝いて間もない師を偲ぶ追悼であり、一気に読通す類の文章である。訳出と決めてから苦しむ日々には思浮ぶのは、やはり学生時代の師竹内敏雄 (一九〇五—一九八二) 先生の厳しいお顔であった。黙読して感銘あらば深く胸奥に蔵うだけでよい、余事は無用、とのお叱りである。恐らく、これが誰にも当然の態度として、フッセルの文章も識者間ではよく知られながら邦文の紹介をこれまで見なかったであろう。このたびの作業は訳者が老いた証でもある。

この老いの弊を去除くため、かつて同じく美学科の研究室で励んだ畏友森谷宇一教授に訳文の検討を願った。師

弟間の敬意や悲哀など人物同士の間隔の表現が絡むゆえ、本来は他者の診断を乞えることではないのだが、学問上の要語に関する失態は許されないと考えたからである。記して深い感謝を捧げる。

翻訳の底本は下記の通りである。

Edmund Husserl, *Erinnerungen an Franz Brentano*. in : *Husserliana* Band XXV (Edmund Husserl, Aufsätze und Vorträge 1911—1921), Nijhoff 1987. S. 304—315.



## フランツ・ブレンターノの想出（一九一九年）

エトムント・フッセル

ブレンターノの「一般」講義 (Vorlesung) を聴く幸運の年はわずか二年しかなかった。なかで「ドイツの大学では半年間の」完全学期はただ一八八四年から八五年にかけての冬学期と一八八五年から八六年にかけての冬学期という二学期だけであった。両年度とも「実践的哲学 (praktische Philosophie)」について週五時間の「一般」講義、さらに哲学演習と並べて、選り抜きの哲学的疑問について週一時間ないし二時間の特殊講義 (Kolloq) を行った。両年度それぞれの夏学期には、聴講資格は初級課程修了者に限る小教室の特殊講義を続行したが、早くも六月第一週には終りとした。これら特殊講義の最初のもは「初等論理学とここに必要な改革 (Die elementare Logik und die in ihr nötigen Reformen)」なる題目のもと、知性の記述心理学なるものの体系的に結付けられる敷地を扱ったが、そのさしい心領界における平行事例にも一箇独立の章として探究は及んでいた。つぎの「心理学および美学の選り抜きの疑問 (Ausgewählte psychologische und ästhetische Fragen)」を語る特殊講義では概論風に想像表象の本質についての記述的根本分析を示した。六月の半ばになるとブレンターノは当時こよなく愛していたヴォルフガング湖 [Wolfgangsee] オーバーエステライヒ州とザルツブルク州との境にある」へと出掛けたが、そこ（湖畔の街サント・ギルゲン St. Gilgen）へは親しく誘われてお伴した。まさしく同じ夏の月々にはいつも、ブレンターノの客舎を訪ねてよい、小さな散歩や舟遊びに（もっと大きな両年唯一の遠足にも）参加してよいとされていて、年齢および分別の大きな差の許す限りで、私は少しばかりブレンターノに親しみを増すことができた。当時の私は大学での勉学を修了したばかりで哲学（私の数  
学博士号の副専攻科目）ではまだ初心者であった。

私の哲学的関心が膨れ上り、生涯の天職として数学に留まるべきか、それとも哲学にとことん打込むべきかと揺れ動く時代に、レンターノあれこれの講義が決め手となった。当時のウィーンでレンターノは御自身のことで一方では最高度に尊敬され讚美されながら、他方では（少いどころでない人々から）隠れイエズス会士、追従家、食わせ者、ソフィスト、小理屈屋などと罵られるほどに評判の人であり、最初に聴講したのは、一度は聴いてみたいと思った、ただの好奇心からである。第一印象で私は少からず驚いた。この痩せた姿、巻毛で縁取られた大きな頭の、鋭く弓なりの精力的な鼻の、たんに頭脳労働ばかりか魂の深い格闘をも語る表情豊かな顔の輪郭ある、この姿は、ありふれた生活の枠から完全に食み出していた。一息ごと一動きごと心の籠る上目で内向きの眼差に、この没入のありさま全体に、はつきりと表れていたのは大きな使命 (Mission) の意識である。講義の言葉は、形式は完成していて、一切のわざとらしい言回し、すべての才知ひけらかし語、あらゆる修辭的慣用句から自由でありながら、素気ない学問的論述の言葉では全然なかつた。どこまでも高揚せる芸術的な文体が具わっていて、これが完全に相応しく自然に、このひとの人柄を表していた。こうして独得の柔かな低い声のかすれた調子で、司祭風の身振りを添えて語るとき、この若い学生の私の面前には、永遠の真理の預言者か、この世ならぬ世界の告知者か、とばかりにレンターノが立っていた。

あらゆる先入見にもかかわらず、この人柄の力に永くは逆らえなかつた。たちまちレンターノの実態がこの身を捉えるとともに、論述の全く比類ない明晰さと弁証の鋭利さとによって、問題を展開しては理論化する、いわばカタレプシー [Katalepsis 強硬症] の力で私は征服されていた。あれこれの講義から私が真先に得たのは、哲学を生涯の職として選ぶ勇氣を与えてくれた確信、言いかえると、哲学もまた真剣勝負の戦場であり、同じく厳密学の精神を以て扱うことができるし、とあらばそのように扱わなくてはならない、という確信である。あらゆる問題とブ

レンターノが取組むさいの混り気ない即物的客観性 (Sachlichkeit)、解決困難事へ向ける問題処理法、さまざま可能なる議論を精妙に弁証してゆく考量、多義的曖昧表現の分離区別、あらゆる哲学的概念を直観内の源泉へと立返らせる還元——こうしたすべてのことが私の気持を驚嘆と揺ぎない信頼とで充たしてくれた。講演では、純粹この上なく事象に没頭する聖者の声調が、安っぽい講壇穴句や洒落の一切を寄せ付けなかった。気の利いた対句は語り口を鋭くさせるので、考えを力強く簡略に伝えたいと安物買いになり勝ちだが、この手の相反定立をブレンターノは、いかなる種類のものですら避けていた。だからこそか、好い気分の遠慮ない会話では、まことに才気溢れ、機知や諧謔で沸立つことができた。最も強烈なのは、忘れがたい哲学的演習における作用力 (Wirksamkeit) であつた。(下記あれこれの主題を憶えてゐる——ヒューム [David Hume] の *Essay über den menschlichen Verstand* と *Über die Prinzipien der Moral*、クルムホルツ [Hermann Ludwig Ferdinand von Helmholtz] の講演 „Die Tatsachen der Wahrnehmung“, デュ・ボア＝レイモン [Emil Heinrich Du Bois-Reymond] の *Grenzen des Naturkennens*) ブレンターノはソクラテス式問答法 (Mäeutik 助産術) の大家であつた。問うては異議を挟んで、あやふやに手探りの初心者を導く術、本気で励んでいる者に勇気を注ぐ術、真理は感じたのにまだ不明瞭である始まりを明瞭な思想や洞察へと変化させる術、こうした術をどれほど心得ていたことか。しかも他方で無駄話屋には、少しも侮辱せず何と手際よく穴舌を終らせていたことか。演習が終れば研究発表者ほか最も熱心な列席者三四名を家へ伴うのが常であり、そこではイータ [Ita Brentano, 1852-1894, 銀行家 Ignatz Leben の娘] 夫人が夕食を用意していた。この席に日常会話は御用なかつた。演習時間の主題が続行で、倦むことなくブレンターノは、新たな問を立てたり講義全体に大きな展望を開いたりしながら語り続けた。自身は与り知らないことだったが、遠慮勝ちの学生どもにどんどん料理に手を伸ばすよう勧めることが、まことに心暖まる夫人の御配慮であり、食事が終るや直ぐさま夫人は姿を消された。一家の近しい友で高名政治家のプレーナー (Ernst von

Plener, 1841-1923) がたまたま不意にこの集いに舞込んだが、ブレンターノは気持を逸らしはしなかった。当の夕は完全に自分の学生のものであり、自分を捉えている議論の主題のものであった。

学生にとってブレンターノは話し易い人であった。話し掛けると喜んで一緒に散歩となり、大都市街路の喧騒に全く惑わされもせず、出された哲学的疑問に答えていた。だが献身的な仕方では学生との学問的窮地ばかりか個人的窮地の面倒までも見て、まことに親切な助言者にして教育者にもなった。信頼できる友と見た者には自分の政治的信念や宗教的信念また自分の個人的運命についても胸中を吐露した。政治の時事問題からは遠ざかっていたが、心情に関する問題はブレンターノにとって古い南ドイツの見方と言う大ドイツ主義の理念であり、この見方のなかでブレンターノは育ち、この見方にいつまでも、プロイセンへの反感と同じ程度に固執していた。この点で私はどうしても一緒になれなかった。ブレンターノにとって明かにプロイセンの流儀は重要な個人的印象としても有益な社会的印象としても決して解り易いものにならなかったが、幸いにも私自身はこうした印象を高く評価できる習わしで育っていたのである。それゆえブレンターノにはプロイセンの歴史に独得の偉大さを感じる力もことごとく欠けていた。プロテスタントイスマスについての態度も同様であって、ここへとカトリク教会から歩み出て近付いたことは決してない。哲学者としてカトリクの教義からは自由であったが、自由であってもプロテスタント思想圏との関りは何ら問題とならず、追感 (Nachfühlen) しての歴史的政治的理解とか、こうした理解から生じる歴史的価値評価ということは、ここでも恐らくほかでもブレンターノの流儀でなかった。カトリク信仰自体については、これを語る大きな尊敬以外の語気を聴いた覚えがない。この信仰によって幅広く作用する宗教的倫理的な諸力を折々ブレンターノは活々と弁護して、愚鈍で軽佻な発言に返していた。ほかに哲学的関係では人格神論 (Theismus) の世界観がブレンターノを古い教会と結付けたが、この世界観は大いに心を捉えて、ややもすれば話題は神の問題と

靈魂不滅の問題に及ぶのであった。神の存在の証明についての週二時間特殊講義（形而上学についての大きな特殊講義の一部で、これを先年ヴェルツブルク同様ウィーンにおいても講じていた）はきわめて入念に考え抜かれていて、丁度私がウィーンを去ったとき、当の諸問題についてプレントナーは新たに研究を開始した。これらの問題は、私の知るところでは最晩年に至るまでプレントナーに添うていた。

だがこうした年々にプレントナーが主に没頭していたのは、一部はさきに述べた講義の主題であった記述心理学（deskriptiv-psychologisch）の問題、一部は感覚心理学（sinnespsychologisch）の研究であって、この研究の方はつい二三年前に公表され、内容はウィーンおよびサンクト・ギルゲンでの会話から（少くとも大筋は）私の記憶に残っていた。初等論理学（elementare Logik）についての講義で自身の創造的な改変として特に詳細かつ歴然と扱ったのは、徹底的にボルツァーノ著『無限の逆説（Paradoxien des Unendlichen）』を顧慮しての、連続体（Kontinua [≡ Kontinuum]）の記述心理学であり、また表象の「直観的と非直観的」「明晰と不明晰」「判明と不判明」「本来的と非本来的」「具象的と抽象的」の差異であり、講義を終える夏学期には、伝統的な判断差異の背後に横たわっている契機にして、判断自体の内在的本質に指摘できる記述的契機すべてを徹底的に究明する試みであった。直ぐさま続けて（さきに触れたように独立の特殊講義 Kolleg として）集中的にプレントナーが没頭したのは想像（Phantasie）の記述的問題（deskriptiv[e] Problem[e]）、しかも特に想像表象（Phantasievorstellung）と知覚表象（Wahrnehmungsvorstellung）との関係であった。これらの講義がずば抜けて刺戟的であったのは、研究する流れのなかで諸々の問題を示していたからであり、比べると「道德・社会・歴史・芸術・宗教を語る広義の」実践的哲学（また簡略な筆記録を私は利用できた論理哲学や形而上学）についての講義は、批判的・弁証法的叙述のものにもかかわらず、ある意味で教理的<sup>ドクマ</sup>性格を具えていて、言いかえると、揺ぎなく到達せる真理にして最終的な理論という印象を呼び起したし当然呼び起して然るべき講義であった。實際

に徹頭徹尾ブレンターノは自身のことを永遠なる哲学 (philosophia perennis) の創り手と自覚していたし、この印象は私には当時ばかりか後日になっても変りなかった。いわば数学の厳密さが高々と求めるところに応じられる方法を得ようと文字通り常に揺がず努めてきて、自身の鋭く研いだ概念において、また堅く継合され体系的に整備された理論において、また敵対の見解に加えた全面懐疑的 (skeptisch) な論駁において、ブレンターノは満足できる真理を獲得したと信じていた。当然のことながら、どれほど決定的に自身の教説を善しとしたにせよ、以前から私の信じたごとく、当の真理にひどく固執はしなかった。例えば若年時に好んだ提題の多くを後年にはまた棄ててしまう。ブレンターノは断じて立止るままの人ではなかった。だが直覚 (Intuition) の分析では深々と奥に迫り、しばしば天才的でありながら比較的早々とブレンターノは直覚から理論へと移行した——つまり鋭い諸概念の固定化へと、検討問題の理論的定式化へと、また可能性あれこれの相互間には批判による選択の余地もあろうのに当の解決可能性の体系的総体の構築へと急いだのである。それゆえ、この哲学流儀への私の判定が正しいならば、ブレンターノはみずから発展する局面のいづれにおいても同じ仕方で自身の、考え抜いた論証の陣形 [Platzhans, スパルタ軍の密集隊形] で武装して確然と纏められた理論をもっていたし、こうした理論でブレンターノは他の誰の教説にも劣らないという気持になれた。カントや以後のドイツ観念論者のごとき思想家では、原初の直覚および先を見越す予感の価値の方が論理的方法や学問的理論の価値より比較にならないほど高いのだが、こうした思想家をブレンターノはほとんど評価しなかった。厳密に見ると当の理論のすべてが非学問的であるところか根本概念のほとんどすべてに「明晰性と判明性」についての改善が望まれるとしてもなお、ひとりの哲学的思想家を偉大と見做し得ること、つまり、その偉大さが理論の完全性にでなく、ほとんど純化されていない曖昧なれども極めて意義深い根本直観 (Grundanschauung [en]) の独創性にもあり得る、同じことだが、何が何でもまずは理性<sup>ロギクス</sup>へ押寄せる論理以前の、

ひたむきな努力にもあり得ること、手短に言えば、理論的に厳密な洞見の作用を及ぼすにはなお遠い動機なれども、哲学的労苦一切の目標にとって全く新種の最終決定的な思考動機 (Denkm o. t. v. [e]) にもあり得ること——このことをブレンターノはほとんど認めなかったであろう。これほどにも全霊を哲学的厳密学の峻烈な理想 (代表は自身にとって精密なる自然科学であった) に捧げていたブレンターノは、ドイツ観念論の体系を退化の代物としか見なかつた。当初は全くブレンターノに導かれていて後年ようやく私自身も達したのが、厳密学たる哲学を思う現在まことに多くの研究者が分ち合う確信、すなわち根本はデカルトで始まる時期の先行的哲学すべてに他ならぬ観念論の体系は、むしろこれを若者の未熟と捉えながら、そうであつても最高度に評価しなくてはならないという確信である。自分らを激しく動かした問題動機 (Problemotiv [e]) について、これを学問的に厳密に扱うことでは満足できる根強いものをカントや以後のドイツ観念論者がほとんど提供しなかつたとしても、こうした問題動機を実際に追理解し、当の直覚の内実に身を置いて考えることのできる者には、観念論者の諸体系内に哲学の完全に新たに最も根柢的な問題次元 (Problemdimension [en]) が明るみに迫出<sup>ず</sup>していることは確かであり、またこうした次元を解明し当次元の本性が求める哲学方法を形成してこそはじめて当次元の究極最高の目標の生れることも確実である。

ちなみにブレンターノの感嘆すべき卓抜の強みがどれほど大きく論理的理論化の営みにあつたとしても、この独得な哲学のおよそ終りなき作用は結局のところ、ブレンターノ自身が独創的思想家として直覚の初発的源泉から思索の糧を汲み、こうして非生産的となつていた一八七〇年代ドイツ哲学に新たな発芽動機を供給したことにもとづいていた。ブレンターノあれこれの方法や理論がどれほど永持ちするであろうか、ここでは決めることができない。これらの動機はとにかく別々の精神なる苗床でブレンターノの苗床においてとは別様の成長を遂げ、こうして当の初発的発芽力ある生命性が新たに証明された。もとよりブレンターノを喜ばせるためにはない。というのも、さ

きに述べた通り自身の哲学をブレンターノは確信していたからである。実際その自信のほどは完璧であった。自分は正しい道に在って、ひたすら学問的な哲学を樹立している、との内的確信はいささかも揺がなかった。すでに確証済みと自分には思われた体系的原論の内部で、この哲学をさらに精密に仕上げることに、ブレンターノは内からも上からも、このために召されていると感じていた。おのれの使命についての絶対疑いない、この信念こそがブレンターノ終生の原事実であった、と私は説きたい。この信念を見なければブレンターノの人となりは理解できず、それゆえ正しく評価することもできない。

こうして何よりも解るのが、努力して得た洞察をただ弘めるためにだけでなく自分自身の思想をさらに究めるためにも、深く心に迫る教育効果、さよう善い意味での学校 (Schule) がブレンターノにとっては極めて大切だったことである。もとよりブレンターノは自身の揺がない信念から外れた逸脱のいづれにも感じ易かったし、この点での異論に出合うと活発になり、久しく熟考せる定式の操作や論駁理由の挙示ではやや頑固なまま、卓抜の弁証法で勝利を誇っていたが、弁証法はやはり、対抗する初発的直観に相手の異論家が立脚しているところでは満足できないものを残すことにもなった。それでも誰ひとり自前で自由な思考はもはや養えず、この難しさはブレンターノ固有の根深い信念に立向うとき尚更であった。

新たな哲学の開拓者であるとの信念と疑いなく結ばれていたのが、ウィーン大学正教授職の再入手にブレンターノが置いていた大きな (そして当時の私にはほとんど解らなかつた) 価値である。確約されながら決して守られなかつた約束で絶えず新たに開ける希望についてブレンターノは多くを語った。もはや博士論文を指導できず、学部構成に出席できず、ましてや自分には少しも好ましくない私講師の資格に受身で甘んじなければならぬとは、まさしく耐え難いことであった。このことでブレンターノはしばしば胸中を苦々しく吐露した。無論こうした事情のもと



でも教職の活動には（夏期講義の自発的な切詰めを除いて）変りなく、以前同様ウィーンばかりか全オーストリアに明確な影響を及ぼした。実践的哲学についての見事な、まさしく古典的クラシカルに完成せる「一般」講義には、冬学期ごと法科第一学期生および全学部生の何百人もの聴講者であった——この多勢が何週間か経て当然ながら激減したのは、教室で要求される規則的共同作業が聴講者全員の問題ではあり得なかつたからである。ちなみに、この講義からは才能ある若者がまたもまたもと演習に参加して、ブレンターノの努力のほどをよく立証していた。

こうした年々「一八八四—八六年」ブレンターノは神経（Zerbrechen）のか細さについて、これを元気にするはずのサンクト・ギルゲンでも多く何やかやとこぼした。烈しい頭脳労働の気晴しにはいつでも、劣らず熱中できる、別の劣らず烈しい何ごとかを求める。ウィーン将棋会（チェスクラブ）ではなかなか乙な指し手（才気あり過ぎ、と誰かが教えてくれたが、狙いの筋にこだわるあまり勝てないことしばしば）と目され、とことん夢中でひとときの勝負に打込むことができた。ほかのときには木彫をやり、絵具や線描の絵に向い、やることにはいつでも熱中した。まさしくいつでも、どこか自発的に、でしかいらなかった。サンクト・ギルゲンへの一緒の旅でブレンターノは直ぐさま手製の便利な彫り駒を取出し、長い道中全部をかけて将棋熱戦（チェス）であった。夫人は達者な画家だったが、サンクト・ギルゲンでは肖像画を描く夫人に喜んで協力、よくしようとの手入れや出来かけ丸ごとの肩代りである。もとより夫人があとでまたもや救いの手、多くの手直しが必至となった。例えば一八八六年に夫人と一緒のブレンターノが私を描いてくれたが、鋭敏な美術史家フィッシャー（Friedrich Theodor Vischer, 1807-1887）の評語の「とく、「愛らしい絵（Ein liebenswürdiges Bild）」であつた。まづに同じく熱心にサンクト・ギルゲンの午後には「庭園（Garten）」で、とは湖に近く人目を避けた小家を背にした草地でのこと）ボツチャ（Bocciapici）ボウリングに似た球戯に耽つた。山登りは全然やらず、程よい遠足だけを好んだ。サンクト・ギルゲンでは、しかしウィーンでも暮し振りはまことに簡素であつた。ちな

みにブレントナー最初の結婚は夫人の財産が目当て、との噂は、当人と知合つて生活習慣を見れば、直ぐさま馬鹿らしいと感じられた事柄である。金持の楽しみ、つまり贅沢品とか美食とか、あらゆる種類の豪華生活についてブレントナーはおよそ感受力を持合せなかつた。煙草は吸わず、食事も飲酒もきわめて質素で、あれこれの違ひなど気にしなかつた。私はと言え、しばしば自宅で食卓に列したものが、そのさい料理や飲物についてブレントナーが特別の好みを語つたり見せたりするのに気付いたことはない。あるときサンクト・ギルゲンで夫人の到着以前に、かなりひどい店で食事の羽目となつたが、そこでもブレントナーはいつもの御満悦で、違ひなど全く気にせず自分の考えや会話だけに没頭していた。鉄道でも一人旅ならば最下等席で結構としたように、どれほど料理が安直でも甘んじられる人であつたし、服装でも同様、ごく目立たぬ品で時折は擦り切れていた。こうしたことすべてにおいて儉約家だが、独得の人柄こそが話題となれば、他の人々への親切を尽せるところでは、やはりブレントナーは氣前が好かつた。若者相手としての態度では確かに重々しくとも、とても親切で情愛が籠り、いつでも學問的形成の促進を思ふばかりか、道德的人格についても氣遣つていた。誰しも、この氣高い導きにはどこまでも信服して、居場所は離れて遠くなつても、なお同じ醇化の力をつねに痛感するしかなかつた。あれこれの講義においてすら身をひとたび委ねた者は、事象を扱う理論においてばかりでなく、人格の純粹な氣品キトクからも心の最も奥深いところでブレントナーに捉えられた。しかも何と有りのままになれる人であつたことか。夏の夕にヴォルフガング湖畔の散歩、寛いで自分自身をあげすけに語つてくれた、あの折々の静かな散歩が私には忘れられない。もともと天才の子供っぽさを具えていたが、本当に子供らしく開けつびるげの人であつた。

ブレントナーとの手紙のやりとりはさほど多くない。私の哲学的処女作『算術の哲学』[Philosophie der Arithmetik I, 1891, 「心からの感謝」と扉に献辞—meinen Lehrer FRANZ BRENTANO in inniger Dankbarkeit] 献呈の許しを乞つた手紙には、

暖く礼を返しつつ、真面目に、わが敵どもの怒りを背負い込んではいけないよ、と諫めてくれた。それでもブレンターノに捧げたが、今度は献呈本を送付しても返事はなかった。ようやく十四年後にはじめてブレンターノは現に献呈のあったことを認めて、礼を述べる言葉も気持よかったが、明かに当の書は、詳しくは見ないか、例の流儀の「斜め読み (quer lesen)」でしかなかった。無論このことで気を悪くするには、ブレンターノは私には高々と仰ぐ存在であり、この人のことをあまりにもよく知っていた。

手紙のやりとりが頻繁に伸びないことには深い理由もあった。初め熱狂せる学生の私に、師として仰ぐ高い尊敬を止めたことは決してないが、ブレンターノの学派仲間で留まる気にはなれなかった。だが、ブレンターノから出た道とはいえ各自がそれぞれの道に入ると、どれほどの激昂を呼んでいたかも私は知っていた。このようなときブレンターノはいかにも易々と不公平になれたし、私のばあいでも同じく、まことに悲痛なことであった。それにまた、もやもやでも激烈な思考動機に心の奥深くから突上げられている者や、まだ概念としては掴めないが既成理論とは合いそうにもない直観に善処したいと励んでいる者ならば、おのれの理論に安んじている人、ましてやブレンターノのごとき論理の大家には、とても喜んで心打明けたくなからう。自分が明晰でないことの責め苦で一杯であり、自分の論理的無能力こそがまさしく探究的思考へと向う原動力であるのに、この無能力の新たな証明や弁証法的論駁を誰が必要としようか。こうした証明や論駁が前提するもの、すなわち方法や概念や命題は残念ながら嫌疑の的、疑わしいとしてまずは締出さなければならぬのに、このことで明晰には論駁できず、みずから明晰にも確にも何ひとつ十分に定立することもできないとは、これこそがまさしく不幸なのだ。私が自分自身となるまでの事態もこれであったし、ここから釈明できるのが、師と私とが人としては離れていないとはいえ、後々まで学問的接触はきわめて難しいとさせた一種の疎隔である。率直に告白しなければならぬが、師の方に欠けているも

のは何も無かった。学問的關係をふたび結び直そうと何度も努めてくださった。この何十年にも私の大きな尊敬は少しも減じていないことを、よく感じてくださった。減じるどころか尊敬の念は増すばかりである。自分自身の発展が進めば進むほど私は、師から受けた衝迫の威力と価値をますます高く重んじることを覚えたのである。

私講師としての夏休みに一度ドナウ河畔「メルクからクレムスにいたるヴァハウ Wachau 溪谷」のシエーンビュール (Schönbrunn) に私はブレンターノを訪ねた——住居用に改装しようとして少し前に「居酒屋 („Taverne“)」を買求めていたのである。姿を見付けたときの有様が忘れられない。家に近付くと左官の一群が見え、なかに痩せこけた長身の男がいて、シャツをはだけ、ズボンに漆喰だらけ、つばの広いソフトで他の連中同様の鍍しごと、まるで、そのころ大通りや横町のいたるところで見掛けたイタリア人労働者にほかならない。ブレンターノであった。にこやかな友の挨拶で迎えて改築図案を見せてくれ、何でも自分でやれ、一緒に働きの無理強しさ、と棟梁や左官の能無し加減にほやいた。ほどなくふたりは哲学論議にのめり込んだが、身なりはそのままであった。

幸い再度ようやく確か一九〇七年にお逢いしたのはフィレンツェで、ベロスグアルド街路 (Via Balloguardo) の立派な家にお住いであった。ここでの何日かを私は、この上ない感動を以てしか思出せない。ほとんど視力を無くした人が、バルコニーからフィレンツェや風景の比類無い眺望を説明したり、とても美しい道を通つて、かつてガレイの住んでいた双つの邸宅へと私や家内を案内したりの姿に、どれほど心は締付けられたか。外見はほとんど変りないと見えたが、ただ髪は白くなり、目は輝きと以前の表情を失つていた。それなのに、この目からいまでも何と多くが語り出され、何と神々しい変容 (Verklärung) であり神への思い (Gotteshoffnung) であつたことか。もちろん哲学について極めて多くが語られた。これも痛ましいことであつた。またも哲学を語れるかと、どれほどブレンターノは心が晴やかになつたことか。この人には教師としての大きな働きが生活の必須事であつたのに、フィレ

ンツエでは独り漫然と日を過ぎなくてはならず、人格の作用を及ぼすことなど不可能であったし、北の国から誰か自分の話を聴いて解る力のある者が来れば、それだけでうれしかったのである。ここでの日々、私には、ウィーンでの学生時代以降の何十年かは力ない夢になってしまったかのようであった。この傑出していて精神力絶大の人を前にして、またもはにかむ初心者の身と私は痛感した。私自身が語るよりも、むしろ私は聴いた。何と美しく整えられて大きく、各区分のすべては確然と形を成し、ここへと話は淀みなく流れてゆく。だが一度だけ御自身が聴こうと望まれ、異議を挟んで遮ることなく、以前の私の対心理主義闘争と絡めて現象学的研究法の意味を私に語らせた。御了解とはならなかった。恐らく少しは私にも罪があった。わが身にも切実な直観と見てきた師の根本直観について、これの改組の必要性をあらためて追理解できるには、概念や論法も確り組織しつかされて不動となっている師の考察法の流儀内では、もはや十分な適応能力もあるまいと見て、この心奥の確信が私を麻痺させていたのである。

この美しい日々を曇らせる耳障りな音は微かにも聴えず、一番目の奥様エミリーエ (Emilie Rueprecht) 夫人が私どもに有らん限りの親切を尽してくださいました。まことに気持よく手厚い仕方で老年の世話をなされ、こうして当時の師の姿にびったりと美しく似合う方であった。ブレンターノはできるだけ多く私と一緒に居たいと望んだが、御自身、その人格によって、またその教への活々とした力によって私に生じた何かへの私の感謝には、決して消えることがないと感じ取られた。老いてなお情愛は深まり一段と穏やかになられた。この人に第一の故国と第二の故国の助成すること余りにも少く、大きな天分の寄進には忘恩で報いてきたのに、ひねくれた老人はここに見えなかった。いつでも御自身のあれこれの理念の世界に生き、完成する御自身の哲学に生きて、お言葉のごとく、この哲学は何十年かの流れで大きな発展を遂げていた。お姿には変容 (Verklärung) の香気が漂い、もはや現世には属さずして生きているところはすでにほとんど高次世界の感であって、この高次の世界を揺ぎなく信じ、これを人格神論

(Theismus) の理論で哲学的に解釈することが、こうした晩年にあっても多忙なお仕事であった。このときにフィレンツェで得た最後の像は私の心の奥底深くに沈んでいる——こうしていまや引続き私のなかで生きてゆくのが、高次の世界から出た、ひとつのお姿である。